

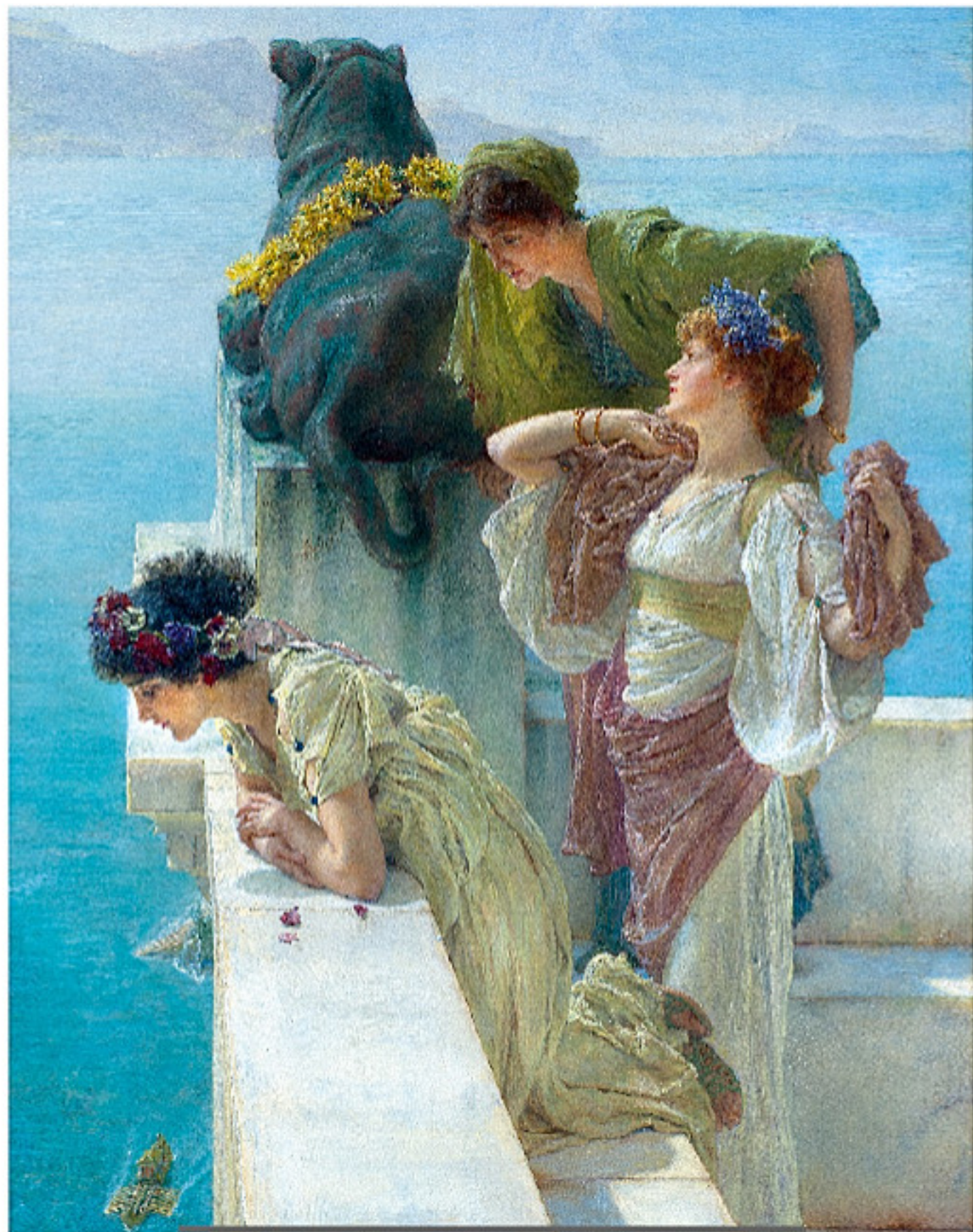
Monatsmagazin Japanisch

現地オリジナル取材と編集で
ウィーンを伝える月刊情報紙

創刊平成元年 創刊29年目 Nr. 333

月刊ウィーン

GEKKAN-WIEN 2017年4月号





杉本純の原子力の話II ウィーンと京都 66



二月(〇日)三月三日にかけて、東京工業大学の主催 国際原子力機関 (IAEA) など内外六機関の協働により、第六回国際シンポジウム・セミナーが大岡山キャンパスで開催された。本国際会議は、文部科学省の支援を受けたグローバル原子力安全・セキュリティ・エージェンツ教育院が国内外の関連機関と協力して開催するもので、プログラムを受託した平成三年度より毎年開催し、本学生生のみならず、国内外の関心のある学生、若手社会人を招へいして教育の環として行ってきた。テーマは原子力安全とセキュリティ・保障措置を交互に取り上げ、今回は原子力安全がテーマである。会場には、内外からの招へい講師が十五名、招へい学生らが十七名、一般参加(五名)など、合計八九名の参加があり、マスコミの取材を受けた。

会期前半のシンポジウムでは、国内外の著名な専門家を講師として招き、公開で講演会を行った。その後、招へい学生らは、広島大学原爆放射線医学研究所放射線影響研究所広島平和記念資料館を訪問し、原爆による人体への放射線影響について学んだ。また、福井県敦賀市

にある高速増殖原型炉「もんじゅ」を視察した。会期後半のセミナーでは、第線の講師陣による講義後、学生たちがグローバルリダに係る二つのテーマ(シビアアクシデント、放射性廃棄物の最終処分)に関して五つのグループに分かれて自主的に討論を行い、議論を交わした。筆者は前半のセッション座長やレセプションの司会、後半はシビアアクシデントに関する講義を担当した。東工大を含む二十七名の学生らは、一週間にわたり多くのことを学んで実体験するとともに、人的ネットワークを拡げることができたと思う。



さて、今月のウィーンと京都の対比では、両市の天文台について述べてみたい。ウィーン市内一区のドナウ運河に面するウラニア天文台は、ベルリン天文台の建設に携わったドイツの天文学者ヴィルヘルムマイヤーにより一九一〇年に開設された。第二次大戦時の爆撃で破壊されたが一九五七年に再建された。屈折式と反射式の二つの型を一体化させた望遠鏡が用いられている。これとは別に、市内から西北西に約三・五キロの岡の上にウィーン大学附属天文台がある。一八八三年にトルケンシャントウに開設された天文台は口径六七センチで当時世界最大の屈折式望遠鏡であった。一九六九年に口径二五〇センチの反射式望遠鏡によるレオポルドフィゲル天文台が開設されている。これらの天文台は子

どもたちを含む一般人への講演会や施設の公開を進めている。

一方、京都山科区、標高二二メートルの花山山山腹にある京都大学附属花山天文台は、口径六〇センチの反射式望遠鏡により一九一五年に開設した。一八七八年開設の国立天文台に次いで我が国では二番目に古い。京都市の都市化のため観測が難しくなり、一九六八年に飛騨天文台が設立され、反射式望遠鏡を花山天文台より移設した。その後、花山天文台には太陽フレア観測用口径一八センチ屈折式望遠鏡、デジタル専用回線、太陽単色像デジタル撮影システム、三次元立体視装置、四次元シアター室などが設置された。現在は、太陽観測とデータ解析および理論数値シミュレーション研究を中心として、学生の教育実習施設の役割を担っている。また、子どもたちを交えた一般人への講演会や施設の公開を進めていることもウィーンと共通している。

余談であるが、筆者がウィーン赴任中の自宅はウラニア天文台の近くだったの、その前を良く通った。二度だけ中に入り、一般向けの講演などの掲示を見たことがある。花山天文台は行ったことがないが、学生時代に同天文台所属の先生の講義を聴いたことがある。両市の天文台を紹介できた幸運に感謝しつつ、編集部に掲載をお願いしたウラニア天文台の写真を掲載させていたたく。

■杉本純 東工大特任教授 前京大教授 元原子力機構ウィーン事務所長 ■

